

聖書日課 『からし種』 2025.4.6-4.13

<p>4月6日 (日)  ルカ 9章</p>	<p>「しかし、イエスは言われた。『あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい』(13節)。「しかし」には二つある。「神はこう言われるが、しかし現実はどうだから」という「現実を優先するしかし」と、「現実はどうだが、しかし神がこう言われるから」という「信仰のしかし」と。十字架に向かわれる主は今日も「信仰のしかし」に生きる幸いに私たちを招いておられる。</p>
<p>7日 (月)  ルカ 10章</p>	<p>「行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ」(3節)。なんと無謀なことをするのだろう。小羊はたまったものではない。しかし神はイエスという小羊を人間という狼の中に送られた。それは無謀以外の何ものでもないが、最後には神の愛が勝利して狼を変え神の国が告げ広められていく。神の御名はほむべきかな。</p>
<p>8日 (火)  ルカ 11章</p>	<p>「あなたがたの体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、濁っていれば、体も暗い」(34節)。私たちの目は何を見るのか。何から光を受けていくのかが問われている。「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった」(ヨハネ1:4)。人の目に「映えるもの」ではなく、命の言に照らされ今日を生きる力をいただいきたい。</p>
<p>9日 (水)  ルカ 12章</p>	<p>「ファリサイ派のパン種に注意なさい。それは偽善である」(1節)。「毒麦のたとえ」(マタイ13章)に示されているように、私たちの心には神の国のパン種だけでなく、ファリサイ派のパン種が混じりあっていて簡単には取り出せない。「神のために」とささげる働きの中にも常に偽善が混じりこんでくる。その危うさを自覚しつつ、聖霊の働きを祈り求めていきたい。</p>

聖書日課 『からし種』 2025.4.6-4.13

<p>10日 (木)</p> <p>ルカ 13章</p>	<p>「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ」(24節)。神の愛はどんなに不出来な者をも包み込む広くて深い愛。その愛は多様な者を受け入れ、「わたしの敵」をも愛する愛であるゆえに、日々わたしの自我が砕かれ、小さく、子どものようになることが求められる道。狭い戸口から入る信仰を求めていこう。</p>
<p>11日 (金)</p> <p>ルカ 14章</p>	<p>「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない」(27節)。悪魔は荒野野で「栄光のメシアとして自分の名があがめられる道」に主イエスを誘った。その誘惑に抗して主イエスは「ただ神の御名があがめられ、神の御心になる道」を選び取られた。今日わたしは「誰の名があがめられることを祈り願うのか」が問われている。</p>
<p>12日 (土)</p> <p>ルカ 15章</p>	<p>「ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけ、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」(20節)。驚くべきことに父は息子の帰還理由を一切問うことなく抱きしめている。息子は食べものにありつき生き延びるためだけに帰ってきたかもしれないのに。「憐れに思う」、つまり「はらわたを痛めるほど心配する愛」が、今日私たちに注がれている。</p>
<p>13日 (日)</p> <p>ルカ 16章</p>	<p>「そうだ、こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ」(3節)。主人から解雇されそうになった管理人に残された延命策は「友達を作る」。富も地位も失った時に最後に残る希望が「関係」というのは、放蕩の末に「父親との関係」だけに希望をかけて帰還を決意したあの「次男」のたとえにも通じる。</p>